

氏 名	上 杉 達 也
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第 4371 号
学位授与の日付	平成 23 年 12 月 31 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 4 条第 2 項該当)

学位論文題目	PRIMARY GLEASON GRADE 4 IMPACT ON BIOCHEMICAL RECURRENCE AFTER PERMANENT INTERSTITIAL BRACHYTHERAPY IN JAPANESE PATIENTS WITH LOW-OR INTERMEDIATE-RISK PROSTATE CANCER (日本人の低、中リスク前立腺癌に対する密封小線源治療後における、プライマリーグリソングレード4の生化学的再発に及ぼす影響)
--------	---

論文審査委員	教授 金澤 右 教授 土井原 博義 准教授 金廣 有彦
--------	-----------------------------

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

限局性前立腺癌に対する、ヨウ素 125 を用いた前立腺癌永久挿入密封小線源療法は 1990 年代に米国で完成し、2003 年に我が国にも導入されたが、日本人のこの治療法の長期予後については不明確なままである。当施設では 2004 年 1 月に導入し、2009 年 12 月までに 414 例に達した。適応は NCCN ガイドラインに基づき、低リスクおよび中リスク前立腺癌とした。全ての生検標本の病理学的再評価を central pathologist 一人が行い、PSA(prostate specific antigen)値を前向きに集計した。生化学的再発の定義は Phoenix consensus(PSA 値が最低値から 2ng/ml 上昇)に基づき、Kaplan-Meier 法ならびに Cox 回帰分析法を用いて解析検討した。経過観察期間の中央値は、36.5 カ月。4、5 年目の生化学的非再発率は各々 91.6、87.0%だった。単変量解析では primary Gleason grade 4 は、きわめて強い再発予測因子となった($p < 0.0001$)。一方、年齢、初診時 PSA、T 分類、D90 については有意な予測因子とはならなかった。多変量解析でも、primary Gleason grade 4 が、PSA 再発の最も強い予測因子となった(危険率 = 6.576, 95%、信頼区間 2.597-16.486, $p < 0.0001$)。密封小線源治療では、Gleason score 4+3 は 3+4 よりも有意に生化学的再発率が高いことが分かり、本治療での Gleason score 4+3 の取り扱いについては慎重を期すべきであると考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、限局性前立腺癌に対するヨウ素 125 を用いた前立腺癌永久挿入密封小線源療法について、2004 年 1 月から 2009 年 12 月までの岡山大学病院における 414 例を対象として、その再発様式を生化学的再発(PSA 再発)と定義して特に Gleason score との関連について評価したものである。その結果、単変量解析ならびに多変量解析において Gleason grade 4 が再発の最も強い予測因子であることが示された。本治療方法においては Gleason score 4+3 は 3+4 よりも有意に生化学的再発が高いことがわかり、本治療での Gleason score 4+3 の取り扱いについては、慎重を期すべきであるとの結論を得た。前立腺癌永久挿入密封小線源療法の適応について科学的に明らかにした臨床論文であり、今後の治療指針に重要な影響を与える価値のある研究と評価される。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。